## 思いやりの社会

浦安市立入船中学校３年　　林　美沙乃

私が「社会を明るくする運動」ときいて一番最初に思い浮かんだことは、いじめや悪ふざけのことだった。学校へ行かなければならない私たちにとって、学校は自分のコミュニティの大部分を占める重要なものだ。学生にとっての社会と言っても良いかもしれない。しかし、その学校でいじめが起こってしまったら、明るい社会とは言えないだろう。実際私がそのような状況になったときも決して治安の良い学級とは言えなかった。

昔の話になるが、私も前にいじめのようなことを学校や学童でされていたことがある。特に心当たりは無いのに、いつもある数人の女子のグループが私に嫌がらせをしてきていた。一緒に遊んでいると仲間外れにしてきたり、悪口を言ってきたりした。私がなるべく彼女たちと距離をとるようにしても、なぜか彼女たちの方から近づいて嫌がらせをしてきた。きっと、彼女たちが私に嫌がらせをする理由は特になく、ただ誰かをいじめたかっただけなのだろう。しかし、仮にそのような軽い気持ちでやっていたとしても、確かに私は傷ついた。学校や学童に行くのがとても苦痛に感じていたのを今でも覚えている。幸い、私にはとても優しく、勇気のある友達がいた。その友達はいつも私を気にかけて、味方でいてくれた。その友達がいてくれたお陰で、私は逃げずに学校や学童に行けたのだろう。

私は、このように良い友達を持っていたから問題なく生活できた。しかし、全員が良い友達を持っているとは限らないし、持っていたとしても問題なく生活できるとも限らない。最悪の場合、非行などの行動に至ってしまうかもしれない。では、明るい社会を作るためにはどうすれば良いのだろうか。

まず、もし何かがあったときに逃げられるように居場所は複数作っていた方が良いと思う。しかし、本来は逃げなければいけないよ

うな状況になることがおかしいはずだ。そこで、いじめが起こりづらい雰囲気をつくることが重要になる。雰囲気だけで変わるのかと疑問に思うかもしれないが、私は雰囲気によって行動が左右されるのを体感したことが実際にある。

以前、私がよく使うバスに乗ったときのことだ。そのバスは利用者に対してサイズが小さく、座席数も少なかった。そのため、混んでいる時間だとかなりいっぱいになる。私が乗ったときも、職場や学校から帰る人の多い夕方の時間だった。帰り道だからか、疲れた顔でスマホを触っている人が多かった。そのとき、一人のおばあさんが乗ってきた。それを見て、ある１人の女性が目の前の席に座っていた女子高生に席を譲るように言った。女子高生はそのまま席を譲ったが、よく見てみると鞄にヘルプマークがついていた。私がそのことを言おうか迷っていると、女子高生が自ら女性に向けてヘルプマークについて説明した。すると、それをきいたおばあさんが

「私は座らなくても良いわ。座って。」

と女子高生に言った。しかし、女子高生も

「私は立っていても大丈夫なので！」

と言い、お互いにゆずり合っていた。私の気のせいかもしれないが、思いやりを持って行動しているからか車内全体の雰囲気が優しくなった気がした。そこで、私も何かしたくなり、私の目の前の席に座っていた先程とは別のおばあさんが降りるときに、

「すみません、降りる人がいるので空けてください。」

と声をかけた。すると、おばあさんから感謝の言葉をかけられてとても嬉しくなった。その後も、急に泣いてしまった先程の女子高生を気にかける人がいたり、その女子高生や他のお年寄りの方に席をゆずる人がいたりと優しい行動をする人がとても多くなった。そして、乗るときには混んでいて嫌だと感じたバスが、降りるときにはこのバスに乗れて良かったとまで思えるような雰囲気になっていた。

だから、私は雰囲気は人の行動を変える重要なものだと考える。

明るく、優しい雰囲気をつくれば暗くて他人を傷つけるようないじめもなくなるのではないだろうか。そして、いじめがなくなれば非行や犯罪もなくなるのではないだろうか。もしかしたら、いじめや非行、犯罪というのはなくならないものかもしれない。しかし、そうであっても私はみんなに優しくして苦しむ人を１人でも減らしていきたい。